# 埼玉県越谷市旧増林村方言のアクセント

飯島一行

## 1．本稿の目的

金田一(1942)、同(1948)において、関東平野に広く分布する「東京式アクセント」および「無アクセント」とは異なるアクセントが、埼玉県東部を中心とした地域に存在することが初めて報告された。金田一氏はこれを「埼玉特殊アクセント」と命名し、旧蓮田町（現蓮田市）方言のアクセントをその典型としながらもいくつかの変種があることを示した。さらに氏はそれらの大きな特徴が次の２点（ｉ、ⅱ）であることを述べている。

**ｉ・２拍名詞の高低が「東京式アクセント」とは反対になる。**

**ⅱ・話者の型を区別する意識が「東京式アクセント」の話者に比べてはっきりしない。**

そして、金田一氏のこの報告以降、半世紀にわたり多くの研究者が調査とその報告を行なってきた。それらの先行研究により、上記ｉ、ⅱに加えて、

**ⅲ・「埼玉特殊アクセント」の少なくとも一部の変種は「上げ核」／ ／（註１）と「句音調」｛「○○’○（…） ｝（註２）をもつと解釈される。**：上野(1977)、同(1984)など。

**ⅳ・金田一氏の調査の話者よりも若い世代では「東京式アクセント」に変化しつつある。**：木野田(1972)など。

等があらたに確認された。しかしながら、金田一氏以降の研究の多くは２拍名詞のみを対象として行われたものであり、当地域のアクセントの全体像が明らかにされたとはいまだ言い難い。

本稿では飯島が 1997 年から継続的に調査を行なっている調査より、埼玉県旧南埼玉郡増林（マシバヤシ）村増林（現越谷市）方言の１～３拍名詞のアクセントを報告する。金田一(1942)、同(1948)の後に報告された埼玉県東部地域のアクセントのうちでもっとも旧蓮田町のアクセントに近いもののひとつと考えられる旧増林村方言のアクセントは、埼玉県東部地域に分布するアクセント全体の考察においても大きな手がかりを与えるものである。本稿では、この旧増林村方言のアクセントが「上げ核」と上昇部分と下降部分とを持つ「句音調」により解釈される体系から変化したものであることを述べる。

以下、本稿においては記号を次のように用いる。先行研究の引用の際にも表記は本

稿のものに置き換えて例示する。

○　自立語の拍、　▽　付属語の拍、　…　任意の拍の連続、　。　句末

「　上昇、　％　中程度の上昇、　’　下降

また、調査地点名は金田一氏の調査当時のものをもちいることとし、現在の行政区画名を適宜併記することにする。

## 2．地域概観と調査の概要

埼玉県旧南埼玉郡増林村増林は現在埼玉県越谷市に属する。旧日光街道越谷宿の郊外に位置し、また、江戸川の水運も利用できた当地は近世より稲作と野菜の近郊農業を基盤とした農村地域であった。が、近年は首都圏の他の田園地帯同様、東京のベッドタウンとして都市化が進んでいる。当地のアクセントについては吉田(1993)に簡単な記述がある他に報告はない。吉田氏の報告については次節で検討する。

飯島の調査は 1999 年の６月と７月に行なった。話者は百木一男（ももきかずお）氏。1921 年生まれで当地生え抜きの男性である。氏は県内で長く公務員をなされ、退職後の現在は農業を営んでおられる。調査は６月の１回目の調査でのみ「型意識の調査」を、１回目と２回目の調査で「調査表を読む調査」を、同じ語彙表を用いて行なった。語彙表については上野善道氏の私家版「アクセント調査表（A)」の類別語彙を中心とした語彙を参考に、独自に編んだものを用いた。

## 3．金田一氏の報告と吉田氏の報告

前節に触れた通り、旧増林村方言のアクセントの報告は吉田(1993)のみである。が、金田一(1942)、および同(1948)には旧増林村に隣接する埼玉県旧北葛飾郡松伏領（マツブシリョウ）村（現松伏町）方言および埼玉県旧北葛飾郡吉川町（現吉川市）方言のアクセントが報告されている。旧松伏領村方言のアクセントは金田一(1942)の分類では「埼玉アクセント２類」、旧吉川町方言のアクセントは同じく「埼玉アクセント３類」である。これを（１）に示す。

（１）金田一(1942)に報告された旧松伏領村方言及び旧吉川町方言のアクセント

| | 旧松伏領村（埼玉アクセント２類） | 旧吉川町（埼玉アクセント３類） |
|---|---|---|
| 類別 | 語例 | 語例 |
| I | 「カ’ゼ。 | 「カ’ゼ。 |
| | *カ「ゼ’ダ。* | *「カゼ’ダ。* |
| | *カ「ゼ’ガ…* | *「カゼ’ガ…* |

| | | |
|---|---|---|
| Ⅱ・Ⅲ | 「ヤ’マ。 | 「ヤ’マ。 |
| | *「ヤ’マダ。* | *「ヤ’マ「ダ。* |
| | 「ヤ’マ「ガ… | 「ヤ’マ「ガ… |
| Ⅳ・Ⅴ | ア「メ。 | ア「メ。 |
| | ア「メ’ダ。 | ア「メ’ダ。 |
| | ア「メ’ガ… | ア「メ’ガ… |

＊金田一(1942)では類別が示されていないので、語例から判断してこれを示した。

斜体字に下線を付した部分が、旧松伏領村方言と旧吉川町方言との間で異なるところである。

なお、1節のⅲを述べた上野(1977)は、旧吉川町方言と同じ「埼玉アクセント3類」に分類されている旧蓮田町方言を金田一(1948)の記述より解釈したものである。

次に吉田氏の報告を（2）に引用する。吉田氏の調査地点は飯島の調査地点に隣接する旧増林村増森（マシモリ）である。

（2）吉田(1993)に報告された埼玉県旧南埼玉郡増林村増森方言のアクセント

| 類別 | 語例 | | | |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | 「カ’マ(釜) | 「ア’メ(飴) | 「ハ’チ(蜂) | 「ミ’ズ(水) |
| | 「カマ’ガ | 「アメ’ガ | ハ「チ’ガ | 「ミズ’ガ |
| Ⅱ | 「ハ’タ(旗) | 「ム’ネ(胸) | 「ハ’シ(橋) | 「ナ’ツ(夏) |
| | 「ハ’タ%ガ | 「ム’ネ%ガ | 「ハ’シ%ガ | 「ナ’ツ%ガ |
| Ⅲ | 「ハ’ナ(花) | 「コ’メ(米) | 「ア’シ(足) | ク「ツ(靴) |
| | 「ハ’ナ%ガ | 「コ’メ%ガ | 「ア’シ%ガ | ク「ツ’ガ |
| Ⅳ | 「カーマ(鎌) | 「フーネ(船) | ハァ「シ(箸) | マー「ツ(松) |
| | 「カ’マ%ガ | 「フネ’ガ | 「ハシ’ガ | 「マ’ツガ |
| Ⅴ | 「アーメ(雨) | 「アーセ(汗) | 「オォビ(帯) | ハ「ル(春) |
| | 「アメガ | ア「ゼガ | オ「ビガ | ハ「ル’ガ |
| Ⅰ | 「○’○ | 「○○’▽ | | |
| Ⅱ・Ⅲ | 「○’○ | 「○’○%▽ | | |
| Ⅳ・Ⅴ | 「○○ or○「○ | 「○○’▽ or ○「○’▽ | | |

＊「アー」 などは2モーラ分の長さ、「ハァ」などは1.5モーラ分の長さを表す。

さて、金田一氏の調査の話者は 1937 年当時の主に高等小学校の生徒であるので、

1925 年前後の生まれであると考えられる。また、吉田氏の調査の話者は 1936 年生まれの女性である。ここで（1）と（2）を見比べると、吉田氏の調査による旧増林村増森方言のアクセントのようすは、金田一氏の「埼玉アクセント３類」に近い。その特徴は助詞がついた時に 「○○’▽ という音調型（（2）で下線をひいたもの）があることで、この点が「埼玉アクセント２類」との違いでもある。金田一氏以降、「埼玉アクセント３類」と同等なアクセントを確認した報告はこの吉田(1993)のみである。飯島の調査においても、金田一(1942)、同(1948)において「埼玉アクセント」が典型的に分布するとされた地点には確認できていない。よって、吉田氏のこの報告は大変貴重なものといえる。

## ４．旧増林村増林方言のアクセント

### 4.1. 型を区別する意識

１回目の調査において、「雨／飴」「鎌／釜」「箸／橋／端」「富士／藤」「蜘蛛／雲」「錐／桐／霧」「花／鼻」の７ペアの言い分けと、「ア’メ ／ ア「メ の聞き分けをみる調査を行なった。その結果、言い分けについては以下のようになった。

（3）「言い分けをみる調査」の結果

○「○ ＝ 雨、鎌、箸、富士、蜘蛛、錐

「○’○ ＝ 飴、釜、橋、端、藤、雲、桐、霧、花、鼻

ほとんど判断がゆれることがなく、話者は明確に２拍語を言い分ける意識のあることが確認できた。また、先行研究において「埼玉特殊アクセント」の特徴とされている、２拍名詞の高低が東京方言と「反対」になる現象も確認できた（註３）。さらに、○「○ に発音する語に関してこれを「強く言う」、これに対し、 「○’○ に発音する語は 「やわらかく言う」といった内省もきかれた。吉田(1993)にも以下の記述がある。

埼玉式の話者にアクセントに関しての内省を求めると、「高低」ではなく「強い」とか、「伸びる」という表現が聞かれることが多かった 吉田(1993: p.9)

また、飯島が 「ア’メ 、 ア「メ の何れかを発音したものを聞き分けてもらう調査においても話者はこの二つの発音を聞き違えることがなかった。よって、飯島の調査の話者は意識においてはアクセントの型を明確に区別することが確認された。

### 4.2. 音調型

4.1. に述べたように「型の区別の意識」は明確にあったが、個々の語の音調型には

大きなゆれがみられる。そのようすを稿末の「表１」、「表２」に示す。「表１」、「表２」とも、まず「単独形」の音調の出方で分けたものをさらに「文節形」の音調の出方で分類した。

これらの表にみられるように、１回目の調査と２回目の調査で異なる型で実現した語が多い。前節に述べた通り、話者は「型を区別する意識」が明瞭であるので、このゆれは話者の知覚に起因するものではなく、語が複数の型で発音されることが許容されている、つまり「音調型」そのものがゆれているとみるべきであろう。

さて、まず１拍、２拍名詞について考察を行なう。１拍名詞の単独形では１種類、文節形では２種類の音調型がきかれた。これに対応して２拍名詞の単独形では２種類の音調型がきかれたが、文節形では５種類もきかれた。この５種類の音調型のうちで、２回の調査で安定してきかれたのは　○「○’▽、「○’○▽ の２種類のみである。これを単独形の音調型との組み合わせでみると、安定してきかれるものは（４）の３つの組み合わせである

（４）旧増林村方言の２拍名詞の音調型

| | 単独形 | 文節形 | |
|---|---|---|---|
| 2-イa＝ | 「○’○。 | 「○’○▽。 | （＜ 2-イa’＝「○’○。　「○’○「▽。　） |
| 2-イb＝ | 「○’○。 | ○「○’▽。 | |
| 2-ロb＝ | ○「○。 | ○「○’▽。 | |

このうち 2-イa は 2-イa’がその本来の形とみられる。その理由は次節に詳説するが、2-イa は、2-イa’のような、一つの句の中にアクセントの山が２つできる音調を避けて音調の山が一つだけになったものであると考えられる。

また、2-ロb の語は、実は単独形が 2-イa、2-イb と同じ「○’○。という音調型で実現することも稀ではないが、これも 2-ロb のように実現するのが本来の型と考えられる。すると「表２」の分類は次のように整理される。

（５）「表２」の分類の整理

| 新しい分類 | 元の分類 |
|---|---|
| 2-0 | 2-イb |
| 2-1 | 2-ロb |
| 2-2 | 2-イa、2-イa’ |
| 1-0 | 1-イ |
| 1-1 | 1-ロ |
| 臨時のもの | 2-ロa、2-イb”、2-イb’ |

結局、１拍・２拍名詞の音調型は以下の（６）のように記述される。（６）には、語例と「この（連体詞）＋文節形」の情報も加えた。

（６）旧増林村増林方言の１拍・２拍名詞の音調型

| 分類 | 単独形 | 文節形 | この(連体詞)＋文節形 |
|---|---|---|---|
| 1-0 | 「柄。 | 「柄’ガ。 | コ「ノ柄’ガ。 |
| 1-1 | 「絵。 | 絵「ガ。 | コ「ノ’絵ガ。 |
| 2-0 | 「ハ’ナ。(鼻) | ハ「ナ’ガ。 | コ「ノハ’ナガ。 |
| 2-1 | ア「キ。(秋) | ア「キ’ガ。 | コ「ノ’ア「キ’ガ。 |
| 2-2 | 「イ’ヌ。(犬) | 「イ’ヌ「ガ。<br>～「イ’ヌガ。 | コ「ノイ’ヌガ。 |

4.3.アクセント体系

4.3.1 １拍、２拍名詞からの考察

上野(1977)、同(1984)では、金田一(1948)をもとに旧蓮田町方言のアクセントを「上げ核」／」／、および「句音調」｛「○○’○（…）｝で解釈する案が示され、これが旧蓮田町方言のアクセントの音韻論的解釈として定説となっている。しかしながら、埼玉県東部地域に分布する他のアクセントについては、このレベルでの音韻論的な解釈が試みられたことがない。本節では上野氏の解釈を参考に、旧増林村方言のアクセントの音韻論的解釈を試みる。

２拍名詞までの観察による結論を示すと旧増林村方言のアクセント体系は（７）のようになる。音調型も併記する。

（７）旧増林村増林方言の１拍・２拍名詞のアクセント体系

| 分類 | 型 | 単独形 | 文節形 | この(連体詞)＋文節形 |
|---|---|---|---|---|
| 1-0 | ／○／ | 柄。 | 柄’ガ。 | コ「ノ柄’ガ。 |
| 1-1 | ／○」／ | 「絵。 | 絵「ガ。 | コ「ノ’<u>絵ガ</u>。 |
| 2-0 | ／○○／ | 「ハ’ナ。(鼻) | ハ「ナ’ガ。 | コ「ノハ’ナガ。 |
| 2-1 | ／○」○／ | ア「キ。(秋) | ア「キ’ガ。 | コ「ノ’ア「キ’ガ。 |
| 2-2 | ／○○」／ | イ’ヌ。(犬) | 「イ’ヌ「ガ。<br>～<u>「イ’ヌガ</u>。 | コ「ノ<u>イ’ヌガ</u>。 |

句音調｛句頭｜句末｝＝｛○「○｜○’○（…）。｝

まず、2-0 の語では「単独形」と「文節形」とで上昇、下降の位置がともにずれるところからこれを無核型とみる。すると 2-0 の語における音調の上昇と下降は句の特

徴と考えられる。「コノ＋文節形」の音調の出方から、{○「○○’○▽}（句全体で５拍）という句音調を抽出できる。１節のⅲで示した旧蓮田町方言の句音調｛「○○’○（…）｝を１拍後ろにずらした形になっているが、これをたとえば{○「○○’○（…）｝のようには解釈せず、下降の部分を句末の表示と捉えたのが（７）の解釈である。単独形（＝句全体で２拍）は句末部分のみが実現、文節形（＝句全体で３拍）では句頭から数えても句末から数えても２拍目になる真ん中の拍で上昇と下降の両方が実現したとみる。

結局、句が全体で２拍のときは{「○’○}、３拍のときは{○「○’○}になる句音調を抽出したわけであるが、これを 2-1、2-2 に属する語に適用すると、2-1 に属する「秋」では１拍目の ア が低いことが、また、2-2 に属する「犬」では、２拍目の ヌ が低いことが語の特徴として抽出できる。ここで、低くなっている拍への下降を核とみると 2-1 については問題がないが、「イ’ヌ「ガ。における ヌ から ガ への上昇が説明できない。これに対し、低くなっている拍からの上昇を核（＝上げ核）とみれば、 2-2 イ’ヌ「ガ。 における イ から ヌ にかけての下降は、２拍目が核を担うことにより ヌ から ガにかけての核の働きによる上昇の準備のために{○「○’○}における音調の山がが１拍前にずれたと見れば良い（もちろん ヌ「ガ は上げ核)。2-1 の 「この（連体詞）＋文節形」においても同様で、例えば コ「ノ’ア「キ’ガ。 では、 コ から ノ にかけての上昇が句音調の句頭部分、 ノ から ア にかけての下降が核による上昇のための準備、 ア から キ にかけての上昇が核、 キ から ガ にかけての下降が句音調の句末部分と説明できる。残る問題は（７）の 1-1 と 2-2 の「この（連体詞）＋文節形」において、何故、句末の助詞にかけての上昇が起こっていないのかということになる。これらでは助詞の直前の拍が核を担っていると考えられるので …○「▽。 という音調型がきかれるはずであるが、実際にはその音調がきかれない。これは、この方言は「句末部分において核による上昇よりも句音調の句末部分の下降のほうが句末の音調を支配する力が強いという性質をもつ」と考えれば説明できるであろう。そのように考えれば、2-2 の文節形においても、助詞への上昇がきかれないことのほうが多いということも説明される。

### 4.3.2 類別体系

３拍名詞からのアクセント体系の考察に移る前に、類別体系について簡単に触れる。旧増林村増林方言の類別体系はおおよそ次の（８）のようになっている。音調型の分類も示しておく。

（8）旧増林村増林方言の類別体系

1拍名詞

1・2・3類x；1-0

3類y；1-1

2拍名詞

1・2x・3x・4x・5類x；2-0

2y・3類y；2-2

4y・5類y；2-1

＊ x、yは類のなかで音調型が異なるもの

有核型の語が無核型の1類に統合される傾向がみられるが、1／2・3／4・5のように統合する東京式アクセントとの対応がみてとれる。

4.3.3　3拍名詞からの考察

稿末の「表2」をみると、旧増林村増林方言の3拍名詞は一瞥しただけでは混乱していて分析不能のようにみえる。が、子細に観察すればこれらはいくつかのグループに分けられることがわかる。この方言では長音、促音、撥音、二重母音、無声化した狭母音などの特殊拍を含む語は所属の少ない音調型で発音されやすい。この点を考慮すると「表2」のAからPまでをいくつかのグループに分類することが可能である。これを（9）に示す。

（9）3拍名詞の音調型の分類

| 分類 | 表2の分類 | 特徴 |
|---|---|---|
| ① | A、B、C | 単独形が「○’○○ である |
| ② | M | 単独形が　○「○’○　文節形が ○「○’○▽ である |
| ③ | N | 単独形が　○「○’○　文節形が ○「○○’▽ である |
| ④ | D、E、F | 単独形が「○○’○ である |
| ⑤ | G、H、I、J、K、L、O、P | 所属語が特殊拍を含む語だけである |

（9）の分類のうち、④は7月の調査に目立つ。7月の調査では2拍名詞においても「○○’▽ という音調型がきかれている。7月の調査で何故語頭の2拍が高い音調型が多く実現したかは原因が不明であるが、今はこれを不問にして 「○○’… は○「○’… が何らかの条件により臨時に実現したものとみると、D＝E＝M、F＝Nとなる。実際に7月調査のD、Eと6月調査のM、同じく7月調査のFと6月調査

のNのでは所属する語彙が良く対応する。また、⑤についても 所属語が特殊拍を含む語だけであるので、⑤は①～④と音韻論的には対立のないものとみて、（9）を次に示す（１０）のように修正する。

（１０）３拍名詞の音調型の分類（修正）

| 分類 | 表２の分類 | 特徴 |
|---|---|---|
| ①’ | A、B、C | 単独形が「○’○○ である |
| ②’ | D、E、M | 単独形が ○「○’○ 文節形が ○「○’○▽ である |
| ③’ | F、N | 単独形が ○「○’○ 文節形が ○「○○’▽ である |
| 他 | G、H、I、J、K、L、O、P | 所属語が特殊拍を含む語だけである |

結局、煩瑣にみえた「表２」も、単独形で２種類、文節形においてAの 「○’○○▽ を含めて３種類が分別されるだけにとどまる。さらに「この(連体詞)＋文節形」においても音調の山が２つ以上聞かれることはない。ここで①’の本来の文節形をAのものとみて、また（7）の議論を勘案した旧増林村増林方言の３名詞のアクセント体系を音調型を併記して（１１）に示す。

（１１）旧増林村増林方言の３名詞のアクセント体系

| 分類 | 型 | 単独形 | 文節形 |
|---|---|---|---|
| 3-0=③’ | ／○○○／ | ○「○’○。 | ○「○○’▽。 |
| 3-2=①’ | ／○○」○／ | 「○’○○。 | 「○’○○▽。 |
| 3-3=②’ | ／○○○」／ | ○「○’○。 | ○「○’○▽。 |

句音調 {句頭｜句末}＝ {○「○｜○’○ (…)。}

（１１）において、3-3 は文節形が ○「○’○「▽。のように実現すべきものが句末の音調の山が消失したもの。3-2 は単独形 「○’○「○。 文節形 「○’○「○’▽。 のように実現すべきものが 3-3 と同じく句末の音調の山が消失したものと見ることができる。音調の山が消失する原因としては、２拍名詞のところでみたように「句末部分においては核による上昇よりも句音調の句末部分の下降のほうが句末の音調を支配する力が強い」という性質をこの方言はもつと考えるべきである。また、3-1 とすべき ／○」○○／の型は、単独形＝ ○「○’○。 文節形＝ ○「○○’▽。 となるので、3-0 とは弁別できない。連体詞をつけた形できいても コ「ノ’○「○○’▽。のようには実現する語がないので、3-1 とすべき語は無核型に統合されてしまっていると考えられる。

以上より旧増林村増林方言のアクセントの体系を（１２）のように記述する。

（１２）旧増林村増林方言の３名詞のアクセント体系

| 分類 | 型 | （語例） | 単独形 | 文節形 |
|---|---|---|---|---|
| 1-0 | ／○／ | | 柄。 | 柄’ガ。 |
| 1-1 | ／○」／ | | 「絵。 | 絵「ガ。 |
| 2-0 | ／○○／ | | 「ハ’ナ。 | ハ「ナ’ガ。 |
| 2-1 | ／○」○／ | （鼻） | ア「キ。 | ア「キ’ガ。 |
| 2-2 | ／○○」／ | （秋） | イ’ヌ。 | 「イ’ヌ「ガ。 |
| | | （犬） | | ～「イ’ヌガ。 |
| 3-0 | ／○○○／ | | カ「タ’チ。 | カ「タチ’ガ。 |
| 3-2 | ／○○」○／ | | 「イ’トコ。 | 「イ’トコガ。 |
| 3-3 | ／○○○」／ | | ア「タ’マ。 | ア「タ’マガ。 |
| | | （形） | | |
| | | （従兄弟） | | |
| | | （頭） | | |

句音調 {句頭｜句末}＝ {○「○｜○’○（…）。}

（句末の音調の山は消失しやすい。）

4.4. 旧増林村増林方言のアクセントの成立について

最後に旧増林村増林方言のアクセントの成立についての問題点を指摘して本稿を終える。前節までの検討から、旧増林村増林方言のアクセントは通時的には

イ・上げ核の特徴を失いつつある。

ロ・類別体系が統合されつつある。

の２点を特徴とするものであることがわかる。つまり、有弁別の体系から無弁別の体系に向かう途中のアクセントということであり、通説に従えば将来的には一型化ないし無アクセント化しそうなアクセントということになる。ところが通時的にはそうであっても、それが「自律的な変化」によるものなのかどうかは充分な検討が必要である。本稿では触れなかったが、埼玉県東部地域のアクセントの変異の分布は異体系のアクセント同士の「接触」などによる「他律的な変化」の可能性の議論の余地を残すものである。本稿における議論に引きつけて述べれば、「句末部分においては核による上昇よりも句音調の句末部分の下降のほうが句末の音調を支配する」という性質は何に由来するのかということになる。そうした通時的変化の解明が今後の課題となる。

註

1　核の規定は上野(1989)による。上げ核は次のように規定される。

名称　　表記　　規定

上げ核　／」／　次を上げようとする。

2　句音調の概念については上野(1984)等を参照のこと。

3　東京方言の「雲」の発音は 「ク’モ であるので、これだけが「高低が反対になる」の例外のようにみえるが、実は東京以外の「東京式アクセント」では「雲」は ク「モと発音される。飯島の調査においても、越谷市に隣接する埼玉県庄和町の「東京式アクセント」をもつ高年層の話者で「雲」＝ ク「モ の発音を観察しいる。

引用文献

・上野善道(1977)「日本語のアクセント」『岩波講座　日本語５　音韻』

・上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古希記念論文集』第２巻　言語学編

・上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座 日本語と日本語教育 第２巻 日本語の音声・音韻（上)』杉藤美代子 編

・木野田れい子(1972)「埼玉県南埼玉郡久喜町のアクセントー曖昧アクセントから東京アクセントへー」『都大論究』第１０号

・金田一春彦(1942)「関東地方に於けるアクセントの分布」『日本語のアクセント』（金田一 1978『日本語方言の研究』に採録)

・金田一春彦(1948)「埼玉県下に分布する特殊アクセントの考察」私家版

・吉田健二(1993)「埼玉特殊アクセントの崩壊過程」『国文学研究』第１１１集

付記

話者になって頂いた百木一男氏への感謝の意をここに表します。また有益なコメントとはげましをいただいた荻野綱男先生、中川美和氏、清水誠治氏をはじめとする編集委員の方々と諸先輩に厚くお礼を申し上げます。

（いいじま かずゆき・東京都立大学大学院生)

表1・増林村方言のアクセントの実現形（1～2拍名詞）

| 分類 | 単独形 | 文節形 | 類 | 1999/06 | 1999/07 |
|---|---|---|---|---|---|
| **2-イb** | 「○’○ | ○「○’▽ | 1<br>2<br>3<br>4<br>5 | 飴、柿、風、傷、蜂、鼻、水、端、桃<br>石、音、垣、北、杭<br>貝、櫛<br>息、今日、箸、味噌<br>牡蠣、蜘蛛、鯉、鶴、春、繭、腿 | 飴、柿、風、傷、蜂、鼻、水、桃<br>石、垣、北、橋<br>膿、櫛<br>今日<br>蜘蛛 |
| 2-イb’ | 「○’○ | 「○○’▽ | 2 | ― | 音 |
| 2-イ | 「○’○ | ○「○▽ | 2 | ― | 串 |
| **2-イa** | 「○’○ | 「○’○▽ | 1<br>2<br>3<br>4<br>5 | ―<br>紙、川、型、橋、冬<br>垢、足、犬、髪、皮、雲、花<br>―<br>― | ―<br>型、杭、冬<br>垢、髪、皮、雲、花、鉢<br>―<br>繭 |
| 2-イa’ | 「○’○ | 「○’○「▽ | 2<br>3 | ―<br>鉢 | 紙、川<br>足、犬 |
| 2-ロa | ○「○ | 「○’○▽ | 4<br>5 | ―<br>― | 息、海、肩<br>猿 |
| **2-ロb** | ○「○ | ○「○’▽ | 1<br>2<br>3<br>4<br>5 | 口<br>串<br>―<br>海、帯、肩、傘、舟、松、麦<br>赤、秋、雨、猿 | 口、端<br>―<br>貝<br>帯、傘、箸、舟、味噌、松、麦<br>赤、秋、雨、牡蠣、鯉、鶴、春、腿 |
| | | | | | |
| **1-イ** | 「○ | 「○’▽ | 1<br>2<br>3<br>X | 柄、蚊、血、戸<br>名、葉、日、藻、矢<br>火、目<br>毛、巣、葉 | 柄、蚊、血、戸<br>名、葉、日、藻、矢<br>絵、木、目<br>毛、歯 |
| **1-ロ** | 「○ | ○「▽ | 1<br>2<br>3<br>X | 帆<br>―<br>絵、木、手<br>― | 帆<br>―<br>火、手<br>巣 |

・1999/06の「膿」は聴きもれ

表2・増林村方言のアクセントの実現形(3拍名詞)

| 分類 | 単独形 | 文節形 | 類 | 1999／6 | 1999／7 |
|---|---|---|---|---|---|
| A | ⌈○'○○ | ⌈○'○○▽ | 5 | 従兄弟 | 胡瓜 |
| B | ⌈○'○○ | ○⌈○'○▽ | 1 | 相撲 | よだれ |
| | | | 2 | — | 小豆、毛抜き |
| | | | 4 | 境、匂い | 宝、匂い |
| | | | 5 | 哀れ、簾<スダレ>、惰け、涙、枕 | 姿、簾<スダレ>、枕 |
| | | | 7 | — | 兜 |
| C | ⌈○'○○ | ○⌈○○'▽ | 1 | — | 印、相撲、名前 |
| | | | 4 | 助け | — |
| | | | 5 | 命、火箸 | 命、従兄弟、心、火箸 |
| D | ⌈○○'○ | ○⌈○'○▽ | 1 | — | うがい、鰹、車、桜、障子、鼻血、羊、港、昔、柳 |
| | | | 2 | 夕べ | 娘 |
| | | | 4 | — | 鮑<カンナ> |
| | | | 5 | 箒 | 朝日 |
| E | ⌈○○'○ | ⌈○○'○▽ | 1 | — | 煙 |
| | | | 2 | 三つ | 三つ |
| F | ⌈○○'○ | ○⌈○○'▽ | 1 | — | 田舎、鰯、漆、踊り、飾り、形、着物、鎖、今年、子供、畳、ついで、机、初め、息子 |
| | | | 4 | — | 男、鏡、明日 |
| | | | 6 | — | ネズミ |
| G | ⌈○○'○ | ○○⌈○'▽ | 1 | 三日 | 三日 |
| H | ⌈○○○ | ○⌈○'○▽ | 2 | — | 夕べ |
| I | ⌈○○○ | ○⌈○○'▽ | 2 | — | 二重 |
| J | ○⌈○'○ | ⌈○'○○▽ | 5 | — | 箒 |
| | | | 6 | — | ススキ |
| K | ○⌈○'○ | ⌈○○'○▽ | 2 | — | 女 |
| L | ○⌈○'○ | ⌈○○○'▽ | 1 | — | 氷 |
| | | | 4 | — | 助け |
| M | ○⌈○'○ | ○⌈○'○▽ | 1 | 田舎、鰯、うがい、車、煙、氷、今年、子供、魚、桜、障子、印、畳、ついで、寝言、初め、鼻血、羊、埃、味方、港、昔、柳、よだれ | 魚、谷間、隣、寝言、埃、味方 |
| | | | 2 | 小豆、女、毛抜き、東、二重、二つ、二人、娘 | 東、二つ、二人 |
| | | | 4 | 頭、団扇、男、表、鏡、敵<カタキ>、刀、鮑<カンナ>、昨日、言葉、暦、白髪、硯、宝、谷間、頼み、俵、包み、鮟、縫い目、鋏、林、光、袋、襖<フスマ>、筵<ムシロ> | 頭、表、敵<カタキ>、刀、昨日、言葉、暦、境、白髪、硯、頼み、俵、包み、鮟、縫い目、鋏、林、光、袋、襖<フスマ>、筵<ムシロ> |
| | | | 5 | 朝日、油、鮑<アワビ>、親子、神楽、鰈、胡瓜、柘榴<ザクロ>、姿、柱、紅葉 | 油、鮑<アワビ>、哀れ、親子、神楽、鰈、柘榴<ザクロ>、涙、柱、紅葉、ワサビ |
| | | | 6 | 鰻、大人、長さ、左、ヒバリ、広さ、ミミズ、ヨモギ | 菖蒲<アヤメ>、兎、鰻、大人、カモメ、狐、雀、背中、高さ、左、ヒバリ、広さ、ミミズ、ヨモギ |
| | | | 7 | 苺、蚕、兜、便り、椿、鉛、一人、緑、病 | 苺、蚕、辛子、鯨、薬、便り、椿、鉛、一つ、一人、緑、病 |
| N | ○⌈○'○ | ○⌈○○'▽ | 1 | 漆、踊り、飾り、形、鰹、着物、鎖、机、隣、名前、息子 | — |
| | | | 4 | 明日 | — |
| | | | 5 | 心、襷<タスキ>、単衣<ヒトエ>、ワサビ | 惰け |
| | | | 6 | 菖蒲<アヤメ>、兎、カモメ、狐、雀、虱、ススキ、スモモ、背中、高さ、団子、田圃、ツバメ、ネズミ、裸、裸足 | 虱、スモモ、団子、田圃、ツバメ、長さ、裸、裸足 |
| | | | 7 | 後ろ、辛子、鯨、薬、卵、盥<タライ>、一つ | 後ろ、卵、盥<タライ> |
| O | ○⌈○○ | ○⌈○○'▽ | 5 | — | 襷<タスキ>、単衣<ヒトエ> |
| P | ○○⌈○ | ○○⌈○'▽ | 1 | 二日 | 二日 |
| | | | 5 | 五つ | 五つ |